

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770220

研究課題名(和文) 中世日本における密教・神道交渉史の研究

研究課題名(英文) Research on the History of Esoteric Buddhist and Shinto Interactions in Medieval Japan

研究代表者

トレンソン スティーブン (Trenson, Steven)

広島大学・総合科学研究科・准教授

研究者番号：10595432

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中世日本における密教と神道の交渉史を龍神信仰の観点から再検討した。中世日本では神祇信仰と密教思想は様々な形で結合し、その結果として中世神道の諸流が確立したが、その歴史的展開については未解決な問題が多く残っている。通説では、中世神道が初めて伊勢神宮の周辺に形成され、その後室生山や三輪山などほかの霊地へ広まったとされているが、本研究では、中世神道の言説において龍神信仰に関わる点が多い事実に着目し、そのために古来龍神信仰の聖地とされた醍醐寺の密教の観点から中世神道の様々な信仰を再考した。その結果として、中世神道が醍醐寺の密教から多大な影響を受けたということを明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This research project focused on the history of esoteric Buddhist and Shinto interactions in medieval Japan from the viewpoint of dragon cults. During the medieval period, kami cults combined with esoteric Buddhist thought in various ways, which resulted in the formation of a number of medieval Shinto lineages. However, there are still many unsolved issues regarding the historical processes behind the establishment of medieval Shinto. The current scholarly consensus is that medieval Shinto first emerged in the area around the Ise shrines and then from there spread to other places such as Mount Muro and Mount Miwa. The present research, however, started out from the observation that medieval Shinto is largely founded on dragon beliefs and therefore reconsidered a number of medieval Shinto issues from the perspective of Daigoji's dragon cult. As a result, it was clarified that Daigoji's esotericism had an important influence on the development of medieval Shinto.

研究分野：日本宗教

キーワード：密教 中世神道 舍利信仰 龍神信仰 醍醐寺

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 現在、日本宗教史の分野では、中世日本における密教と神道の相互関係の歴史的な流れの解明が、一つの重要な課題とされている。中世には、王家の権力を支えていた密教は神祇神話を取り巻く種々の密教的言説を生み出した。たとえば伊勢神宮や大神神社などの神道霊地では、密教と神道が融合した様々な宗教思想と儀礼が形成されていた。これらの思想と儀礼は後世に御流や三輪流などの「神道流」として体系化された。しかし、中世神道の形成の歴史的なプロセスが十分に解明されているとは言えない。

(2) 中世神道の信仰や言説は多種多様であるが、それらの言説は突然に成立したのではない。たとえば、中世神道のテキストでは龍神信仰や舍利・宝珠信仰に関わる点、たとえば「不動明王・舍利(宝珠)・愛染明王」という三点形式の舍利信仰が多く見られるが、それらは急に現れたのではなく、歴史的に展開し、発達したものである。しかし、現在、その歴史的な展開過程は十分に理解されていない。

(3) 従来、中世神道に大きな影響を与えた「不動・如意輪・愛染」の舍利・宝珠信仰の成立過程が不明であるとされていた。通説では、その信仰が十四世紀初めに創出されたと言われるが、筆者は、過去研究において、その三尊形式の信仰がすでに十二世紀末までに醍醐寺系の龍神信仰を軸に確立されていたという点を論証した。

(4) よって、中世の密教と神道の相互関係を醍醐寺系の龍神信仰から検討すれば新たな見解が得られるであろうと思ひ、その研究を行うことに決めたわけである。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、中世神道の諸信仰の形成経緯に新たな光を投ずることである。現在の通説的理解では、まず伊勢両宮の周辺に両部神道の言説が成立したとする。その後、その諸説が三輪山や室生山など他の霊地に伝わったとされている。しかし、中世神道思想そのものの源泉が平安京の寺院に遡る可能性があると考えられ、また諸寺院の中で特に醍醐寺の密教が重要であると推察される。

(2) したがって、本研究は当初より以下の二点を明らかにしようとすることを目的としていた：

醍醐寺系の密教、特にその龍神信仰が中世神道の形成に多大な影響を与えたという事実

十六世紀初頭に終幕を迎えたとされる中世神道が、それ以後でも宗教史の

様々な局面(たとえば兵法書)において重要な役割を果たし続けたという点

(3) しかし、研究を実施する過程において二点目を徹底的に論じるのに時間が足りないことが分かったため、醍醐寺の龍神信仰が中世神道の信仰に及ぼした影響を明らかにするという研究に集中することにした。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究では、中世神道の諸信仰に頻繁に登場する龍神信仰や舍利・宝珠信仰の言説に着目し、その言説と醍醐寺系の龍神信仰との関係を考察した。たとえば、伊勢、室生山や三輪山、あるいは巖島で展開した宗教のテキストに出てくる龍神信仰をピックアップし、それを醍醐寺の龍神信仰から見直した。あるいは、たとえば慈円の「夢想記」のように、醍醐寺の龍神信仰と関係すると考えられる中世神道的な側面を取り上げて、その相互関係を分析した。

(2) また、その研究の一環として、醍醐寺の法流から派生し、中世神道にも大きな影響を及ぼしたと考えられる舍利・宝珠法(駄都法)を考察した。具体的に、『Dhatu(駄都)法口伝集』(金沢文庫保管称名寺所蔵, 295.15.1-3)という写本の翻刻を作り、その内容の分析研究を遂行した。

## 4. 研究成果

(1) まず、2016年3月に『祈雨・宝珠・龍中世真言密教の深層』(京都大学学術出版会、495頁)という研究書を公表したことを特筆したい。この研究書は本研究課題により得られた成果ではないが、本研究課題を進めるために不可欠である醍醐寺の龍神・舍利・宝珠信仰を解明している。本書の要点は、不動・愛染の舍利・宝珠信仰がすでに十二世紀末までに龍神信仰として醍醐寺で成立していたという論点である。この舍利・宝珠信仰は中世神道に取り入れられ、その中に重要な役割を果たしているため、中世神道の諸信仰を醍醐寺の密教から見直すという営みに大きな意義があると言える。

(2) 中世神道には創造神話、国土観、王権観や成仏論など様々な側面があるが、それらの側面はすべて神と仏の二つの霊力に依拠するものである。つまり、それらは一方的に神あるいは仏の尊格のみを中心とする側面ではなく、仏の垂迹とされ、あるいは仏と一体となった神を中心とする秘事である。そのような秘事はいつから作られ始めたのかは不明であるが、十二世紀末に伊勢神宮周辺の寺院で成立したとされる初期中世神道書以外、天台僧慈円(1155~1225)の「夢想記」も神祇信仰と密教を融合させるテキストとして早いものである。慈円の夢では、天皇と

皇后はそれぞれ一字金輪（または不動明王）と仏眼仏母の化身とされ、または両部曼荼羅を代表するとされるが、皇子は大日如来及び天照大神と同体とされた。この夢想は有名であるが、その思想の由来についてはいまだ定説がない。なお、慈円はこの夢について即位灌頂にも触れて、そうすることによって本人は自分が見た夢の信仰が実際には即位灌頂においても影響を働きかけたかのように暗示しているが、それを裏付ける資料はない。ただし、その後、中世の密教寺院、とりわけ醍醐寺において様々な即位灌頂の儀礼が作られ、それらの儀礼ではダキニ天や歡喜天などが本尊として重要な役割を果たしているとされている。しかし、本研究では、慈円の夢想記の宗教思想と醍醐寺の龍神・舍利・宝珠信仰との類似性を明らかにし、思想面における慈円と醍醐寺との関係を示した。つまり、慈円が醍醐寺の密教から影響を受けた可能性があると論じた。また、醍醐寺の龍神信仰では宝珠の別姿である「仏母」（仏眼または愛染明王）の信仰が最も重要であるが、慈円の夢想でも、それ以後に成立した醍醐寺の即位灌頂でも、同じく「仏母」が本尊のような役割を果たしている点を論じた。要するに、醍醐寺の即位灌頂の本尊として歡喜天が仰がれたという先学の説を否定し、その本尊がむしろ仏母である愛染明王であったと反論した。そして次は、ダキニ天と愛染が教学上深い関係で結ばれている事実を根拠に、即位灌頂の本尊が宝珠の化身としての「仏母」であると論じた。その信仰が、少なくとも醍醐寺に限って見れば、醍醐寺の龍神信仰に遡ると考えられることは、重要である。

（この研究は図書 2. の英文論文においてすでに部分的に公表されているが、和文論文は執筆中である。）

（3）中世神道を考える場合、一般的な神仏習合の諸信仰への考慮も重要である。神仏習合の始まりはいわゆる中世神道の登場よりかなり古いが、王権と絡めた神仏習合の信仰として、厳島神社の龍神信仰がある。本研究では、平家納経経箱の意匠に見られる双龍と五輪塔に注目し、その由来と思想的特徴について考察した。双龍と五輪塔は第一に醍醐寺の龍神信仰を想起させる。そこで、醍醐寺の龍神信仰と経箱意匠との関係を考察し、結論として、意匠そのものが直接に醍醐寺の法流に由来すると論じた。そして平家がなぜ醍醐寺の龍神信仰を新たに厳島神の信仰として樹立させた理由として、醍醐寺で伝授されていた宝珠信仰が王権の神聖性を支えていたという事実を挙げた。これによって、すでに十二世紀末の厳島信仰では王権、神祇思想と龍神信仰が巧みに結合されていたことが分かる。それは中世神道の形成史を考える上では重要な事実であるが、この思想の源流が醍醐寺の龍神信仰に遡るという点を見逃してはいけぬ。

（4）中世神道の基盤が舍利信仰にあると言える。行基が伊勢神宮で仏舍利を埋納したという伝説は有名である。舍利信仰は、無論天台宗でも奉じられていたが、特に真言宗で重視されていた。そして真言宗では舍利信仰は龍神信仰と不可分の関係にある。それゆえに、中世神道が伊勢神宮だけではなく、蛇神や龍神の聖地である室生山と三輪山をも中心に展開したということは重要な事実であり、決して偶然ではないと考えられる。ところが、真言宗には舍利を本尊とする舍利・宝珠法（駄都法）があった。それは舍利を室生山の宝珠や龍と同体と観想するという修法であるが、中世の真言僧が毎日後夜の時に行っていたと言われている。中世神道にも影響を与えた信仰であるために、その歴史と特徴を考察した。そしてその考察の一環として『Dhatu（駄都）法口伝集』（金沢文庫保管称名寺所蔵、295.15.1-3、1281年～1282年写）の翻刻を作り、その内容を分析した。この分析から、醍醐寺で発生した駄都法が鎌倉時代に毎日行う修法へと変貌し、本聖教書写の時点までに不動・愛染信仰などをも含むかなり豊富な儀礼形態へと発達したことが分かった。それは、どのような経緯を経て東密の舍利信仰が中世神道に流入したかという問題を考察する上で重要な事実である。

（この研究は翻刻の作業がまだ完成していないため未発表であるが、できるだけ早くまとめ公表したい。）

（5）醍醐寺の密教、とりわけその龍神信仰が中世神道に大きな影響を与えたことはすでに以上の概説から明らかであると判断できるが、醍醐寺の密教が歴史的に伊勢神宮、室生山、三輪山や西大寺などの宗教思想とどのように関係を結ぶようになったのかは、まだよく分かっていない大きな問題である。筆者はすでにその研究に着手してはいるが、発展途上の段階にある。この研究については、十二世紀末の醍醐寺ですでに中世神道書が伝授されていたと考えられることは重要である。これは最近真福寺（大須文庫）で発見された『野決目録』（醍醐寺の勝賢伝、守覚法親王編纂）に、密教の聖教のほかいくつかの神道書が含まれているという事実に基づいている判断である。これらの聖教と神道書は真福寺に伝来されており、一部の内容はすでに紹介されているが、総合的な研究はまだなされていない。醍醐寺の密教と中世神道の関係を検討するために、合わせて『野決』具書伝来の解明とその内容の分析を行う必要があるため、この問題の考察は別の機会に期したい。

<引用文献>

- a. 阿部泰郎「書かれたものとしての神道密教聖教の中の神祇書」(『中世日本の宗教テキスト体系』名古屋大学出版会、2013年所収) 430 - 449

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

1. Trenson, Steven, 「平家納経経箱意匠の一考察 醍醐寺の龍神信仰の視座より」, 『人間文化研究』, 第九号、査読有、2017、pp. 1-20

〔学会発表〕(計8件)

1. Trenson, Steven, “The Universe Inside a Rice Bowl: Prolegomena to the Sacredness of Rice Grains in Medieval Japanese Esoteric Buddhism,” Sophia University Institute of Comparative Culture workshop “Rites, Rice, and Rokuji Myōō,” 9 July 2016, Tokyo, Sophia University

2. Trenson, Steven, 「『Dhatu 法口伝集』上中下」, 国際研究集会「法会と空間」, 2015年10月3日、京都府、京都大学

3. Trenson, Steven, 「中世日本真言密教における不動・愛染信仰の一考察」, 広島大学・首都師範大学研究協同創設学術研究会「東アジア世界とシルクロードの縁えにし」, 2015年7月30日、東広島市、広島大学

4. Trenson, Steven, 「中世真言密教祈雨法の舍利・宝珠信仰と中世神道との関係をめぐって」, 国際研究集会「多分野複合の視角から見た日本仏教国際的研」, 2015年1月23日、東京都、早稲田大学

5. Trenson, Steven, “The Concept of the ‘Mother of All the Buddhas’ in Medieval Shingon Esoteric Buddhism: Some Universal and Particular Aspects,” International Conference “Bouddhisme et universalisme – Bukkyō to fūhen shugi,” organized by Collège de France and EFEO, 5 Oct 2014, Kyoto, Kyoto Center of EFEO

6. Trenson, Steven, “‘Living Buddhas’: The Story of the Self-mummifying Ascetics at Mount Yudono,” International Conference “The Processes of Dying in the Ancient Greek World,” 1 Sept 2014, Kyoto, Kyoto University

7. Trenson, Steven, “A New Perspective on the Historical Emergence of the Tripartite Wish-fulfilling Jewel Cult in Medieval Shingon Buddhism,” the 14th International Conference of EAJS, 29 Aug 2014, Ljubljana, University of Ljubljana, Slovenia

8. Trenson, Steven, “The Place and Significance of the Esoteric Rain Ritual in Medieval Shingon Tradition,” Workshop “New Directions in Medieval and Early Japan Studies,” 4 Apr 2014, Los Angeles, University of Southern California, USA

〔図書〕(計2件)

1. Trenson, Steven, “A Study on the Combination of the Deities Fudō and Aizen in Medieval Shingon Esoteric Buddhism,” in *Networks and Identities: Buddhist Connections Across Asia* (tentative title), Dynamics in the History of Religions (Brill Series), edited by Christoph Anderl, Ann Heirman, and Carmen Meinert, Leiden, Brill, pp. 109-137 (peer-reviewed, forthcoming 2017)

2. Trenson, Steven, “The ‘Universal Wisdom’ of the Buddha-Mother Butsugen in Medieval Japanese Esoteric Buddhism,” in *Buddhism and Universalism: Perspectives at the History of Asian Civilizations* (tentative title), edited by Marc-Henri Deroche, Iyanaga Nobumi, and Kazuo Kano, to be published by Hawai’i University Press, Honolulu, or CNRS Press, Paris (forthcoming 2017)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

トレンソン スティーブン

(TRENSON Steven)

広島大学・大学院総合科学研究科・准教授  
研究者番号：10595432

(2) 研究協力者

上野 勝之 (UENO Katsuyuki)